

「音」字の成り立ちについて

著者	謝 廖科
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	21/22
ページ	1-22
発行年	2017-12-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123202

「音」字の成り立ちについて

謝 廖科

はじめに

「音」と「聲」¹は、中国古代文献の中で関連性が高く、区別しにくい概念である。先秦文献には、「音」と「聲」の区別について言及した説があるが、これらの記述は、互いに異なるのみならず、用語法の混乱や矛盾も存在する。例えば、許慎(58頃—147頃)の『説文解字』には「(聲は、)心から生じ、外に節あらば、之を音と謂う」²、『礼記』楽記篇には「凡そ音の起こるは、人心に由りて生ずるなり。人心の動くは、物の之をして然らしむるなり。物に感じて動く、故に聲に形わる。聲 相応ず、故に変を生ず。変 方を成す、之を音と謂う。」³などの記述が見える。前例の『説文解字』には、「(聲)生於心」とあり、「聲」は「心から生ずるもの」としているが、後例の『礼記』には「凡音之起、由人心生也」とあり、「音」は「心から生ずるもの」としている。

また、先秦文献には、「聲音」と「音聲」が二文字の複合詞としてすでに表れており、「音」と「聲」を緻密に区別する必要のない場合があるが⁴、両者を区別しないと読み取れない用例も存在する。

天下皆知美之為美、斯惡已。皆知善之為善、斯不善已。故有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨。⁵(『老子』養生第二)

天下皆 美の美為るを知るも、斯れ惡のみ。皆 善の善為るを知るも、斯れ不善のみ。

¹ 誤解を防ぐため、本論では旧字体の「聲」字を使う。

² 「(聲)生於心、有節於外、謂之音。」後漢・許慎『説文解字』(世界書局 1979) 77-78 頁に拠る。

³ 「凡音之起、由人心生也。人心之動、物使之然也。感於物而動、故形於聲。聲相応、故生變。變成方、謂之音。」『礼記』楽記篇(十三經注疏本)に拠る。

⁴ (孟子)曰、為肥甘不足於口与、輕煖不足於体与、抑為采色不足視於目与、聲音不足聽於耳与、便嬖不足使令於前与。『孟子注疏』(十三經注疏本)。

⁵ 『老子道德經』(四部叢刊本)。また、他の版本における該当部分が聊か異なっている部分がある。例えば、馬王堆帛書本老子は、「[有無之相]生也、難易之相成也、長短之相刑(形)也、高下之相盈也、音聲之相和也、先後之相隨(隨)、恒也。」に作る。高明『帛書老子校注』(中華書局 1996) 229-230 頁に拠る。同書 230 頁校勘記も参考にした。

故に有と無は相生じ、難きと易きは相成り、長きと短きは相形し、高きと下きは相傾け、音と聲は相和し、前と後は相隨う。

この例によると、「有」と「無」、「難」と「易」、「長」と「短」、「高」と「下」、「前」と「後」は明らかに対照的な概念であるから、「音」と「聲」は両者の差異が何であるのか分からないが、区別をつけたほうがよいと考えられる。

これまで「音」と「聲」の使い分けを明らかにする研究は、主に訓詁学の方法を利用して両字の意味的な相違を探求することであると言えよう。訓詁学とは、中国伝統の言語学のうちの一分野であり、理解できなくなった古代の言葉をその時代の言語で解釈することである。訓詁学においては形訓、聲訓、義訓という三つの方法があると一般的に認められているが⁶、王力氏（1900－1986）が「文学者が何に基づいて本義を識別するのか。主に字形に基づくのである。字形を分析して、字の本義を説明することができる。それによって「詞」の本義を理解することに役立つ。」⁷と述べている。王力氏の言う「字形を分析する」ことは、事実上「形訓」であると思われる。六書における象形、指事、会意、形聲も形訓であり、許慎の『説文解字』は、主に小篆の字形とその構造を分析することを通じて、即ち形訓の方法によって字の意味を解釈する⁸。

一方、考古学の進展によって、現在では、紀元前 1300 年前後から前 1000 年頃にかけての殷の時代に使われていた甲骨文字や、それと時代的にほとんど差のない青銅器の銘文、つまり金文等の古文字資料を参照できる。よって、現代では、小篆は決して最古の文字とはみなせない。小篆と甲骨文字の時間的隔たりはおおよそ約一千年あり、小篆是最古の字形と相対的に近いが、漢字の歴史では相当に新しい書体と言えよう。王寧氏（1936－）は、「初期の漢字は形と意味が統一されているのである。換言すれば、漢字の字形は直接に漢字の意味を用いて解釈できる。それに反して、漢語単音詞の意味は、記録された漢字の形体から探求することができる。」⁹と主張する。漢字の本義を探求するためには、漢字の本字を知らなければならない。『説文解字』は小篆に対して「形訓」という方法を用い、現行する古代の訓詁書のうちで最も信用できる書物であるが、『説文解字』で用いた小篆は最も古い字形ではないため、漢字の本義を考察するには不十分である。よって、より古い字形を用いて再検討する必要がある。

そこで、小稿は、「音」と「聲」の区別を研究する一環として、まず、伝統的な文字学の研

⁶ 郭在貽『訓詁学』（中華書局 2005）43 頁に拠る。

⁷ 「文学者が何に基づいて本義を識別するのか？ 主に字形。分析字形、能説明字の本義、從而有助於了解詞の本義。」王力『古代漢語』第一冊（中華書局 1999）152 頁に拠る。

⁸ 郭在貽『訓詁学』（中華書局 2005）43 頁に拠る。

⁹ 「早期漢字は形義統一的、也就是說、漢字の字形可以直接用它的意義來解釋。反之、漢語單音詞的詞義、可以從記錄它的漢字形體中來探求。」王寧『訓詁学原理』（中国国際廣播出版社 1996）39 頁に拠る。

究を代表する『説文解字』における「音」字と「聲」字との記述を検討する。続いて、「音」字に関する先行研究をまとめ、甲骨文字や出土文献を利用しつつ、「音」字の成り立ちを明らかにする。

さて、本稿に使用する用語を一部説明する。「語源」は、言語学の用語であるヨーロッパのエチモロジー（英：etymology）の概念を意味する術語であり¹⁰、中国伝統言語学の分野では使用できるかどうか、現在でも定説には達していない。よって本稿も「語源」という言葉を避ける。しかし、従来の研究者は、「字源」「語源」「詞源」などや「派生」「引伸」「孳乳」などの言葉を明確に区別していないので、今の研究に困難をもたらしている。本稿では、主に王寧氏の『訓詁学原理』¹¹と落合淳思氏（1974-）の『漢字の成り立ち』¹²に基づき、誤解を防ぐため、用語を以下のように使用する。

字源 漢字の字形の成り立ちを指す¹³。本字は借字の「字源」である。

本字 本字とは、ある能記（仏：signifiant）を表すため、専らにある所記（仏：signifié）として作られる字である。

借字 借字とは、新しい所記を表しながら、新しい能記を作らず、本字の字形や発音を借りることを通じて新しいシニフィエを表す字である。本字と借字が「同源字」¹⁴を定義する。

本義 文字（本字）が作られた段階で、最初の字形が直接的に表す意味である。文字学の概念に属する。

原義 詞源の意味を指し、実際に運用される意味である。本義と必ずしも一致していない¹⁵。訓詁学の概念に属する。









一 『説文解字』における「音」字と「聲」字

後漢・許慎が著した『説文解字』において、「音」字と「聲」字は互訓であり、許慎はそれぞれに解釈を記しているものの、意義の区別をつけることは難しい。

¹⁰ 亀井孝「語源」『言語 諸言語 倭族語』（吉川弘文館 1992）207 頁に拠る。

¹¹ 王寧『訓詁学原理』（中国国際広播出版社 1996）。

¹² 落合淳思『漢字の成り立ち』（筑摩書房 2014）。

¹³ 例えば、「雨」字の成り立ちは  →  →  であるが、 が  の字源であり、 が  と  の字源である。

¹⁴ 同源字とは、「凡音義皆近、音近義同、或義近音同的字、叫做同源字。這些字都有同一来源。」である。王力『同源字典』（商務印書館 1982）3 頁による。

¹⁵ 例えば、「麤」という「字」の本義は三つの鹿によって舞い上げられるチリであるが、「詞」としての「麤」は普通のチリであり、三つの鹿によって舞い上げられるチリとは限らない。王寧『訓詁学原理』44 頁に拠る。

音、聲也。生於心、有節於外、謂之音。宮商角徵羽、聲、絲竹金石匏土革木、音也。從言、含一。凡音之属皆属音。¹⁶

音、聲なり。心より生じ、外に節あり、之を音と謂う。宮商角徵羽は、聲、絲竹金石匏土革木は、音なり。言に従い、一を含む。凡そ音の属は皆音に属す。

聲、音也。從耳、殸聲。殸、籥文磬。¹⁷

聲、音なり。耳に従い、殸の聲。殸は、籥文の磬。

清・段玉裁（1735－1815）の『説文解字注』における「音」字と「聲」字に関する解釈は、おおむね許慎説を踏襲したものである。

聲生於心、有節於外、謂之音。十一字一句。各本聲下衍也字。樂記曰、聲成文、謂之音。宮商角徵羽、聲也。宋本無也。絲竹金石匏土革木、音也。從言含一、有節之意也。於今切、七部。凡音之属皆從音¹⁸。

「聲は心より生じ、外に節有り、之を音と謂う。」十一字一句。各本は「聲」の下に「也」の字を衍するなり。樂記に曰わく、「聲は文成らば、之を音と謂う」と。「宮商角徵羽、聲なり」。宋本は「也」無し。「絲竹金石匏土革木は、音なり。言に従い、一を含む」とは、節有るの意なり。於今の切、七部。凡そ音の属は皆音に従う。

音也。音下曰、聲也。二篆為轉注、此渾言之也。析言之、則曰、生於心、有節於外、謂之音。宮商角徵羽、聲也。絲竹金石匏土革木、音也。樂記曰、知聲而不知音者、禽獸是也。從耳、殸聲。書盈切。十一部。殸、籥文磬、見石部¹⁹。

音なり。音の下曰く、「聲なり」と。二篆は轉注と為り、此は之を渾言するなり。之を析言すれば、則ち曰わく、「心より生じ、外に節有り、之を音と謂う。宮商角徵羽、聲なり。絲竹金石匏土革木、音なり」と。「樂記」に曰わく、「聲を知り而して音を知らざる者は、禽獸是れなり」と。耳に従い、殸の聲。書盈の切。十一部。殸は、籥文の磬、石部に見ゆ。

清・桂馥（1736－1805）の『説文解字義証』は以上二人の説を概ね認めた上で、『詩』邶風の日月、『国語』周語²⁰、『白虎通徳論』、『鶡冠子』などを引用して説明を加える。さらに、

¹⁶ 後漢・許慎『説文解字』（世界書局 1979）77-78 頁に拠る。

¹⁷ 『説文解字』399 頁に拠る。

¹⁸ 清・段玉裁『説文解字注』（中華書局 2013）102 頁に拠る。

¹⁹ 『説文解字注』598 頁に拠る。

²⁰ 「国語、楽之所集曰聲」は、『説文解字義証』（清・桂馥『説文解字義証』（上海古籍出版社 1981）222 頁に拠る）から引用するものであるが、現在の通行本『国語 周語』を考察すると、「草木以節之、物得其常曰楽極、極之所集曰聲、聲応相保曰和、細大不逾曰平」のみがある。桂馥の引用は誤りがあるかもしれない。『国語』（四部叢刊本）30 頁に拠る。

桂馥は、次のように新たな一説を提出した。

初発口単出者、謂之聲。衆和合成章、謂之音。²¹

初めて口より発して単に出る者、之を聲と謂う。衆和して合せて章と成る、之を音と謂う。

清・朱駿聲(1788－1858)は『説文通訓定聲』において、上記の桂馥の説を認めた。彼は「聲」について以下のような解釈をした。

按、単出曰聲、宮商角徵羽五聲是也。襍比為音、金石絲竹匏土革木八音是也。²²

案ずるに、単に出るものは聲と曰う、宮商角徵羽の五聲は是れなり。襍比して音と為る、金石絲竹匏土革木の八音は是れなり。

以上の説から、清代の説文学者による「音」字と「聲」字の解釈は、以下の二種類にまとめられる。

1) 音は「節」のある聲である。

2) 単独のものは聲で、複数のものは音である。

ただし、『説文解字』及び清代に成立した注釈のみによれば、「音」字の成り立ちが不明であるし、「音」字と「聲」字の使い分けを判断することができない。かつ、いずれの説であっても、恣意性が見られるから、徹底的に問題を分析したと言い難いであろう。特に、「音」字の成り立ちを説明するのに、「含一(一を含む)」を無視することができないが²³、管見の限り、古来、これを論理的に説明することがない。かくして、新しい資料や研究方法を利用しなければならぬであろう。

二 古文字における「音」字の成り立ち

二・1 「音」字と「言」字の関係



















以下は、高明氏(1909－1992)・涂白奎氏(1955－)の『古文字類編』²⁴に拠る。

²¹ 清・桂馥『説文解字義証』(上海古籍出版社 1981) 222 頁に拠る。

²² 清・朱駿聲『説文通訓定聲』(藝文印書館 1975) 872 頁に拠る。

²³ 「含一(一を含む)」については、『説文解字』には、また二例がある。一つは、卷六に「甘、美也。従口、含一。一、道也。凡甘之属皆従甘。」であり、もう一つは、卷十五に「戌、滅也。九月、陽氣微、万物畢成、陽下入地也。五行、土生於戌、盛於戌。従戌、含一。凡戌之属皆従戌。」である。両例は、どちらも文字学による説ではないと考えられる。

²⁴ 高明・涂白奎『古文字類編』(上海古籍出版社 2008)。

言	音
 合 21631 拾 8.1 乙 766 一期 一期 四期  甲 499 京津 3561 一期 二期	
 伯矩鼎 周 早  中山王鼎 戰 國	 殷 簋 周 中  郟王子旗 鐘 春秋  秦公罇 春 秋  曾侯乙鐘 戰 國  曾侯乙鐘 戰 國
 包山 126 郭店忠信 璽 3343 戰 國 戰 國 戰 國  包山 157 璽 3076 璽 4285 戰 國 戰 國 戰 國  包山 157 璽 3076 璽 4285 戰 國 戰 國 戰 國	 秦公石罇 春 秋  包山 248 璽 4284 戰 國 戰 國  陶四 101 郭店五行 貨系 1376 戰 國 戰 國 戰 國  陶四 101 郭店五行 貨系 1376 戰 國 戰 國 戰 國
 音	 音

図—25


甲骨文字においては、「音」字と「言」字は一字であり、発音と字形がほぼ同じであると見なしてよい。ここに于省吾氏（1896－1984）の説を引用する。



音言、初本同名、後岐為二。吳大澂謂、古謹字從音。六国時字、音言互用也。其証一也。

羅振玉説戠字云、説文解字戠闕、從戈從音。此從言。故金文識  諸字、皆如此作…中


²⁵ 『古文字類編』1362頁と1068頁に拠る。


略…古從言從音殆通用不別。其証二也。郭沫若云、考言音、古本同類字。如許書從口辛聲、



音從言含一。兩字于古今文中每通用。…中略…其証三也。秦公鍾其音銑銑、音字作。

古璽文字徵三一、音字作、亦作。其証四也。墨子非樂上、黃言孔章即簧音孔章。詳墨子新証。呂氏春秋順說、而言之与響即如音之与響也。聽言其与人穀言也、莊子齊物論穀言作穀音。詳呂氏春秋新証。其証五也。由以上五証觀之、可知言音古本同字。蓋古文於字画空隙處、加點或小横為飾、多無意義之可言。後以言音用途有別、逐分化為二矣²⁶。

音と言は、初め名が同じであり、後二つに分かれた。呉大澂は言う、「古代に謹字は音に従った。六国の時の字は、音と言が互用された。」これは一つ目の証拠である。羅振玉は戠字を説明し、「『説文解字』には戠が欠けており、戈に従って音に従う。ここに言に従

う。故に金文での識やなどの字は、皆このように作られた…中略…古代に言に従っても音に従ってもほとんど通用して区別がなかった」と言う。これは二つ目の証拠である。郭沫若は、「言音を考察すれば、古代ももとは同類の字であった。例えば許慎の書（『説文解字』）には（言字が）口に従って辛の聲であり、音字が言に従って一を含む。兩字が古文と今文の中でいつも通用されていた。」と言う。…中略…これは三つ目の証拠であ

る。秦公鍾には、「其の音銑銑なり」の「音」字がとなっている。『古璽文字徵』三

一には、「音」字がとなり、またとなっている。これは四つ目の証拠である。『墨子』「非樂上」においては、「黃言孔章」が即ち「簧音孔章」である。『墨子新証』に詳しい。『呂氏春秋』「順說」においては、「而言之与響」が即ち「如音之与響」である。「聽言」においては、「其与人穀言也」でありながら、『莊子』「齊物論」においては、「穀言」が「穀音」となった。『呂氏春秋新証』に詳しい。これは五つ目の証拠である。以上の五証拠から見れば、「言」字と「音」字が古代にもともと同じ字ということが分かる。大概古代の文字は、字画のすきまに、飾りとして点或いは小さい横線を加え、多くは特に意味を持たない。後「音」字と「言」字の用途は区別が生じて、しだいに二つの字に分化した。

²⁶ 于省吾「釈舌」『双劍謄殷契駢枝統編』（琉璃廠來薰閣 1949）31-32 頁に拠る。

この説は、定説であると広く認められており、現在の古文字研究はすべてこの説に従っている。筆者の調査によると、于省吾氏が引用した説以外、伝世文献における「音」字と「言」字の通用はもう一例が存在する。

『史記』孝武本紀には、「見ることを得べきに非ざれども、其の音を聞くに、人の言と等し（非可得見、聞其音、与人言等）」²⁷という文がある。これは漢の武帝に関する有名なエピソードである。漢の武帝は重い病にかかったが、医師は何もできないので、巫術の神官に助けを求めるしかなかった。『史記』封禪書と『漢書』郊祀志上は、同じ内容を記録しているが、この文を「非可得見、聞其言、言与人音等」に作る²⁸。当然、文献の転写の誤りと見なしてもよいが、「音」・「言」両字の通用としてもよいであろう。

さらに、「音」字と「言」字の通用を説明するため、出土文献を利用し、もう一例を補足する。

1973年、湖南省長沙市の馬王堆漢墓三号墓から、帛書に記された多数の資料が出土した。整理の結果、24種の古籍の中には、馬王堆漢墓帛書五行篇（以下、馬王堆『五行』と略称する）が発見された²⁹。1993年、湖北省荊門市の郭店一号墓から、竹簡に記された数多くの典籍が出土した。整理された文字資料の中には、馬王堆『五行』とほぼ同じ文献が発見され、一般的には郭店楚簡『五行』（以下、郭店『五行』と略称する）と呼ばれている³⁰。

馬王堆『五行』と郭店『五行』については、文字や章節に若干の相違があるが、大部分は大差がないと見なせるであろう³¹。この二つの資料には、以下のような記述がある³²。ほぼ同文のため、書き下しは一つのみ取り上げる。

金聖（聲）而玉振之、有徳者也。金聲、善也。玉言、聖也。善、人道也。徳、天道也、唯有徳者、然後能金聲而玉振之之。（馬王堆『五行』）

²⁷ 『史記』（中華書局 2013）585頁。

²⁸ 当該箇所校勘記には「本書卷二八封禪書作『聞其言言与人音等』、漢書卷二五郊祀志上、通鑑卷二〇漢紀十二武帝元狩五年同」とある。『史記』（中華書局 2013）617頁。また、『史記会注考証』には、李笠氏（1894-1962）の「書、志作『言与人音等』、此『音』『言』二字妄易」という説が引用された。瀧川資言考証、楊海崢整理『史記会注考証』二（上海古籍出版社 2015）652頁。

²⁹ 馬王堆漢墓帛書の出土状況および馬王堆『五行』の文献状況については、国家文物局古文獻研究室『馬王堆帛書（一）』（文物出版社、1980）、池田知久『馬王堆漢墓帛書五行篇研究』（汲古書院 1993）を参照。

³⁰ 郭店一号墓竹簡の出土状況および郭店『五行』の文献状況については、湖北省荊門市博物館「荊門郭店一号墓」（『文物』第七期、1997）、荊門博物館『郭店楚墓竹簡』（文物出版社、1998）、浅野裕一「『五行篇』の成立事情—郭店写本と馬王堆写本の比較—」（『中国出土資料研究』第七号、2003）等を参照。

³¹ 注30前掲浅野裕一氏の論文を参照。

³² 馬王堆『五行』のテキストは、国家文物局古文獻研究室『馬王堆帛書（一）』（文物出版社、1980）を底本とし、郭店『五行』のテキストは、武漢大学簡帛研究中心、荊門市博物館編著『楚地出土戰国簡冊合集（一） 郭店楚墓竹書』（文物出版社 2011）を底本とし、校勘を行った。訓読は、前掲池田知久著書と西信康「『孟子』万章下篇「金聲而玉振之」考—馬王堆漢墓帛書『五行』を手がかりに—」（『北海道大学文学研究科研究論集』第六号 2006）を参照する。

金聖（聲）而玉振之、有徳者也。金聲、善也。玉音、聖也。善、人道也。徳、天道也。唯有徳者、然後能金聲而玉振之。（郭店『五行』）

金聲して之を玉振するは、徳有る者なり。金聲は、善なり。玉音は、聖なり。善は、人道なり。徳は、天道なり。唯だ徳有る者のみ、然る後能く金聲して之を玉振す。

馬王堆『五行』は「玉言」とするが³³、郭店『五行』は「玉音」とする。よって、「音」字と「言」字が共通して用いられる一例とみなせるのではないか。

王力氏は『同源字典』³⁴で「音」字と「言」字を同源字としていないが、劉鈞傑氏が王力氏と同じ研究方法を利用して、著した『同源字典補』で、両字を同源字とした³⁵。

本稿もこの説を採用する立場に立ち、論述する。

二・2「音」字と「言」字の字源についての先行研究

甲骨文字においては「音」字と「言」字がもともと一字であったことが明らかになったため、「音」字と「言」字の字源をまとめて考察したい。管見の限り、従来「音・言」字の字源に関する説は五種類がある。

二・2・1 大簫説

郭沫若氏（1882－1978）は、「釈辭言」で「言・音」字の本義を「大簫」とする。

考言音古本同類字、如許書言從口𠂔聲、音從言含一。兩字於古金中每相通用。…中略…羅振玉謂「從言從音殆通用不別」是也。觀此所從之、言字並不從𠂔作、此乃言之最古字、從口象形、与古文之磬鼓字同意。…中略…言之本為樂器、此由字形已可得充分之断定。其轉化為言説之言者、蓋引申之義也。原始人之音樂即原始人之言語、於遠方伝令每籍樂器之音以藏事。故大簫之言亦可轉為言語之言。³⁶

言と音を考察すれば、古代ももとは同類の字であった。例えば、許慎の書（『説文解字』）には、「言」字が口に従って𠂔の聲であり、「音」字が言に従って一を含む。この両字が古代の金文の中で常に通用されていた。…中略…羅振玉が言った「言に従っても音に従ってもほとんど通用して区別がなかった」は正しいのである。ここの従うことを見ると、

³³ 龐樸氏は意味の上から「玉言」は「玉振」であると校定するが、原文の文字は「言」であることを認める。龐樸『帛書五行篇研究』（齊魯書社 1980）34頁に拠る。

³⁴ 王力『同源字典』（商務印書館 1982）。

³⁵ 劉鈞傑『同源字典補』（商務印書館 1998）205頁に拠る。

³⁶ 郭沫若「釈辭言」『郭沫若全集考古篇第一卷』（科学出版社 1982）98-99頁に拠る。

「言」字は𠄎に従って作られるわけではなく、これがすなわち「言」の最も古い字であり、口に従う象形であり、古文字の「磬・鼓」字との意味が同じである。…中略…「言」はもともと楽器であり、これは字形によってすでに十分に断定することができる。それが「言説」の「言」に転化したのは、思うに引伸の意味であろう。原始人の音楽は即ち原始人の言語であり、遠方へ伝令する度に楽器の音を利用して事柄を隠したのである。故に大簫を表した「言」がまた言語を表した「言」に転化された。

郭沫若氏は許慎の説に従って、「言」字の成り立ちが「従口辛聲」、つまり形聲であることを認めるが、字源を「大簫を象る」、つまり象形と解釈する。これは明らかに矛盾であろう。また、郭沫若氏は『爾雅』「釈楽」から「大簫は之を言と謂い、小さき者は之を筵と謂う（大簫謂之言、小者謂之筵³⁷）」を引用し証拠とし、「言・音」を象形文字と見なす。しかし、「大簫」とされる「言」は、後代の借字と見なされる。つまりただ「言」の発音を借りているのみで「大簫」を表す可能性も存在する。なお、「原始人之音楽即原始人之言語、於遠方伝令每藉樂器之音以蔽事。故大簫之言亦可転為言語之言。」という説の証拠も挙げていない。葉玉森氏（1880－1933）は郭沫若氏に反論している。

按郭氏謂𠄎 𠄎 象簫管、口以吹之、援爾雅大簫謂言作証。予思古有人類即有語言、先哲造字似応先造言語之言。釈文本『大簫謂之言』之言作筵、則言其省段。曰象吹簫之形、必非朔誼。且口在𠄎下、何能像吹？觀卜辭龠字作𠄎、下象編管、上象覆口、吹意自顯。如先哲造言字象吹簫、則口字必倒覆於上作𠄎 𠄎 方合³⁸。



考えるに郭氏は𠄎 𠄎 が簫管を象り、口でこれを吹くといい、『爾雅』に大簫は言ということを書いて証にした。私は古代に人類がいれば即ち言語があった、先哲が字を作った時まず言語の「言」を作るにちがいないだろうと考えている。『經典釈文』はもともと「大簫、之を言と謂う」の「言」は「筵」に作っているから、言とはその（筵の字の）省略と仮借である。簫を吹く形を象ると言うのは、絶対に原義ではない。且つ口は𠄎の下にあり、

どうして吹くのを象ることができるのか？卜辞を見れば「龠」字は𠄎に作り、下の部分が

³⁷ 晋・郭璞注、北宋・邢昺疏『爾雅注疏』（十三經注疏本）「釈楽第七」に拠る。

³⁸ 『甲骨文詁林第一冊』694頁に拠る。


編管を象り、上の部分が口を覆うことを象り、吹くという意味が自ら明らかである。もし先哲が「言」字を作るのに、簫を吹くことを象れば、すなわち「口」字は必ず上に倒置し

て   としてこそ符合する。


葉玉森氏の説を踏まえれば、「言・音」字の本義は楽器とは言い難いと考えられる。

二・2・Ⅱ祭器説



『説文解字』には、「言」字は「口に従い、辛の聲（従口、辛聲）³⁹」という記述がある。白川静氏（1910－2006）はこれについて以下のように述べる。

辛と口とに従う。辛は入墨に用いる針の形で、盟誓のときには自己盟誓を行ない、もし違約のときにはその罰を受けることを示す。口はその盟誓の書を入れる器の形。その書を載書というので、 をサイの音で読む。言はその器の前に辛をおき、神に盟誓することばをいう。⁴⁰

そのうえで、白川氏は「言」字の解釈の過程をより詳しく説明する。

言は辛と祝祷の器である  に従う。神に告げ祈り、また誓約するときに、もし偽りがあるときは神罰を受けるという自己盟誓が行われるが、その形式を文字化したものである。⁴¹
言は神に誓って祈ることばをいう。⁴²

『説文解字』には、「音」字について「言に従い一を含む」という記述がある。白川氏は以下のように説明する。

言の下部は祝祷の器である  であるが、そこに一を加えて、器中に自鳴の音を発することを示す。一を節ある意とするものであろう。…（中略）…言の下部の祝祷の器を示す  の中に、神の応答を示す一を加えた形。神はその音を以て神の訪れを示した。器の自鳴を示す意である。⁴³

これに続けて、白川氏は「音」字の原義を「このようにして祈り、神の反応があるときには、『音づれ』としての暗示があるとされ、その『音づれ』を音という⁴⁴。」と結論づけた。

³⁹ 辛と辛は同源字であり、いずれも刃物の象形である。落合淳思『漢字の成り立ち』244頁に拠る。

⁴⁰ 白川静『字統』（平凡社 1988）268頁に拠る。

⁴¹ 『字統』68頁に拠る。

⁴² 白川静『字通』（平凡社 1996）99頁に拠る。白川氏は、六書の会意字「武信是なり」を解釈する時、この主張を重ねて言明する。『漢字の世界 1』（平凡社 2003）22頁に拠る。

⁴³ 『字統』68頁に拠る。

⁴⁴ 『字統』68頁に拠る。『字統』268－269頁と内容がほぼ同じである。

白川氏は、𠂔は盟誓を行う際に文書を入れる器であり、辛が違約する場合懲罰としてイレズミをする時用いられる針と解釈する。しかしながら、白川氏はいわゆる「イレズミ」という風習が殷の時代に存在したという証拠を挙げていない。「一を含む」が「器の自鳴」を表すことについても根拠を挙げていない。さらに、𠂔について、白川氏はこれが「クチ」ではなく、祭器「サイ」の意味があることを発見したことは、前人未到の卓説だと言ってもよいものの、絶対化することには危険が伴うだろう。白川氏は、次のように断言している。

甲骨文・金文の文字には、𠂔形を含む文字で、この形を口耳の口を解しうるものは一字もない。⁴⁵

しかし、李圃氏（1934－2012）の研究によれば、「甲骨文字における𠂔形は、若干の異なる字素であり、例えば『口舌』の『口』、『坎坷』の『坷』、『器具』の『器』などである。（甲骨文中の𠂔形為若幹個不同的字素、如口舌之“口”、坎坷之“坷”、器具之“器”等⁴⁶。）」という。落合淳思氏も、「白川は、先に述べたように呪術や原始信仰に偏重して字源研究を行ったため、類似する字形は似たような解釈になる傾向がある。しかし、ここで挙げたように、別のものが同じ形で表現されるような場合には一律に解釈することはできないのであり、個別の分析が必要なのである⁴⁷。」と評価を下した。無前提に漢字の字源を呪術儀礼と結びつける研究方法は、有効性が低いと考えられる。

二・二・𠂔舌上説

鄭樵（1104－1162）が『通志』六書略に「言は、二に従い、舌に従う。二は、古文の上の字。舌の上より出す者は、言なり（言、従二、従舌。二、古文上字。自舌上而出者、言也）⁴⁸」と論ずる。鄭樵の説によれば、舌の上から出すものが「言」である。即ち「言」字は会意字であると言えるであろう。鄭樵の見解は傾聴に値すると考える。辻井京雲氏も「『舌』『言』と『音』という字の古い形がならんでいますが、とてもよく似ています。口から発する『こえ』、いずれも『口、こえ』にかかわりのある字なのです⁴⁹」と主張し、2012年最新に出版された『字源』⁵⁰もこの説を採用した。

「言」字と「舌」字が如何なる関係があるかを明らかにするためには、鄭樵の説をより深く

⁴⁵ 白川静『漢字百話』（中央公論社 1978）41頁に拠る。

⁴⁶ 李圃『甲骨文字学』（学林出版社 1995）38頁に拠る。






























⁴⁷ 落合淳思『漢字の成り立ち』（筑摩書房 2014）187頁に拠る。

⁴⁸ 南宋・鄭樵撰、王樹民点校『通志二十略』（中華書局 1995）254頁に拠る。

⁴⁹ 辻井京雲『図説 漢字の成り立ち事典』（教育出版株式会社 1993）178-179頁に拠る。

⁵⁰ 李学勤主編『字源』（天津古籍出版社 2012）167頁と197頁に拠る。

理解すべきであろう。『説文解字』に収録される「言」字と「舌」字の小篆字形、および戦国文字の構造から見れば、確かに鄭樵の主張が成り立つ可能性は高い。甲骨文字の字形からみるのみでは、この説が正しいかどうかを断言することができないであろうが、本稿では「舌上説」を再検討する必要があると考える。


上	舌
 乙 2243 一期  後下 8.7 一期	 合 916 合 2202 合 17696 一期 一期 一期  合 1730 合 17410 一期 一期
 臣辰盂 周 早  汨子孟姜 春秋  新鄭虎符 戰 國  鄒魯問量 戰 國  秦公罇 春秋  中山王壺 戰 國  鄂君舟節 戰 國  中山王壽 戰 國	 舌 觚 商 代  舌 爵 商 代
 秦公石磬 春秋  包山讀 1 戰 國  璽集 4207 戰 國  郭店成之 戰 國  璽集 2828 戰 國  徒  陶四 093 戰 國  璽集 0099 戰 國  貨系 2469 戰 國  包山 150 戰 國  璽集 1075 戰 國	 陶四 065 戰 國  雲夢封診 戰 國
	


図二⁵¹

なぜならば、まず、鄭樵が「言は、二に従い」、かつ「二は、古文の上字」と主張する。図二を参照すれば、「上」字の古文字字形は、「二」字の字形と似ているが、春秋時代以後、「上」

⁵¹『古文字類編』227 頁と 367 頁に拠る。




字の字形が「二」字から一変したのであろう。一方、筆者が『殷墟甲骨刻辞類纂』⁵²に収録され

る用例を調査した結果、「言」は、最もありふれた形が「」であり、75 例のうち 45 例を占

める⁵³との結論が分かった。金文でも「」が代表字体であると言えるのではないかと。つまり、

「言」字の成り立ちは「舌」字の上に「二」を加えたとはみなしがたい。しかも、「二」を加えるという方法は、『古文字類編』の中でほかに見うけられないため、「孤証」とみなしてもよいのではないかと。

また、「舌」字は、『金文編』⁵⁴に一字も収められず、『殷周金文集成引得』⁵⁵は 26 例の「舌」字を収録する。その中では、22 点の青銅器が殷代のものとされており、22 点の青銅器の中、一


点は銘文が識別されないが、18 点の銘文が「」の形である。つまり、「舌」字の金文書体においては、「」のような点をつけるのは常態とみなせるであろう。これに対して、「言」字の金文書体はほぼ「」点をつけていない。

以上から、「舌」字と「言」字は成り立ちにおいて繋がりが無いことが明らかであると言えるであろう。

二・2・IV 木鐸説

『甲骨文大辞典』⁵⁶には、「言」字と「音」字の原義が以下のように挙げられる。

舌：象木鐸之鐸舌振動之形、口為倒置之鐸体、為鐸舌、卜辞中与告、言実為一字⁵⁷。

舌：木鐸の鐸舌の振動する形に象り、口は倒置する鐸体と為し、は鐸舌と為す。卜辞の中に告と言とは実是一字と為す。

⁵² 姚孝遂主編『殷墟甲骨刻辞類纂』上冊（中華書局 1989）255-256 頁に拠る。


⁵³ 『漢字の成り立ち』245 頁に拠る。


⁵⁴ 容庚『金文編』（科学出版社 1959）。

⁵⁵ 張亜初主編『殷周金文集成引得』（中華書局 2001）。



⁵⁶ 徐中舒主編『甲骨文大辞典』（四川辞書出版社 1989）。

⁵⁷ 『甲骨文大辞典』208 頁に拠る。

言：字形与《説文》篆文略同、但実与告、舌為一字之異構。口象木鐸倒置之形、其上之

与 均為鐸舌。告、舌、言三字初義相同、後世乃分化為三字⁵⁸。

言：字形は『説文』の篆文と略ぼ同じ、但し実は告、舌と一字の異構と為す。口は木鐸の

倒置の形を象り、其の上の と とは均しく鐸舌と為す。告・舌・言の三字の初義は相い同じく、後世に乃ち分化して三字と為す。

音：象倒置之木鐸及鐸舌之形、与告、舌、言実為一字⁵⁹。

音：倒置する木鐸と鐸舌の形を象り、告、舌、言と実是一字を為す。

以上の「木鐸説」によると、「言」「音」及び「舌」の字源が木鐸と繋がっている。しかし、この三字の字形を「木鐸に象る」という証拠が明示されていない。しかも、そもそも人類や動物の舌はありふれたものである。そうであるにもかかわらず、木鐸の鐸舌に象ることは極めて不自然と考えられる。「舌上説」でもすでに説明したように、「舌」字と「言・音」字は同じ字源ではなく、字源を異にする可能性が高いと考えられる。

ちなみに、許慎をはじめ、加藤常賢氏⁶⁰ (1884－1978) や藤堂明保氏⁶¹ (1914－1985) も「舌」字を会意字とするが、近年の研究⁶²によれば、「舌」字を象形字と見なす説が有力視されている。

二・2・V形聲説

許慎は「音」字を「言に従い、一を含む」とし、「言」字を「口に従い、辛の聲」、つまり形聲字としている。ただし、許慎の説が正しいかどうか、その説をいかに理解すべきか、という問題が残る。先行研究としては、呉其昌氏 (1904－1944) と劉釗氏 (1959－) の説を取り上げる。

「音・言」字と「辛」字の成り立ちについて、関連性があるという見解を示したのは、許慎以降では、管見の限り、呉其昌氏⁶³のみである。呉氏の説は、次の二つに集約できる。

⁵⁸ 『甲骨文大辞典』221-222 頁に拠る。

⁵⁹ 『甲骨文大辞典』228 頁に拠る。

⁶⁰ 加藤常賢『漢字の起原』（徳間書店 1970）196-197 頁に拠る。

⁶¹ 藤堂明保『漢字語源辞典』（学燈社 1965）527 頁に拠る。



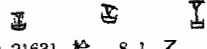



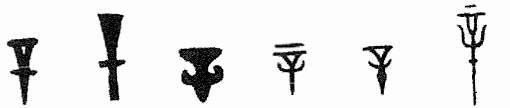

⁶² 李圃『甲骨文字学』38 頁、また落合淳思『甲骨文字小字典』（筑摩書房 2011）107 頁に拠る。

⁶³ 李圃主編『古文字詁林』（上海教育出版社 2000）715 頁に拠る。初出は、呉其昌「金文名象疏証」『国立武漢大学

一つ目は、甲骨文字と金文における「辛」字と「言」字の構造は、大差がない、ということである。図三⁶⁴のように、呉氏は時代順に「辛」字と「言」字の字形を列挙して分析した結果、「『**𠂔**』『**辛**』と『**言**』は、実際は同じ形であり同じ音である字（『**𠂔**』『**辛**』『**言**』実同形同聲之字）」とする。また、「『**辛**』『**言**』が一字であることは、金文の成り立ちにおける最も普遍的な原則に符合する当然の形態である（『**辛**』『**言**』之為一字、乃合乎金文体構上最普遍公例之当然形態也）」という結論に達した。

二つ目は、『漢書』王莽伝の「信郷侯修」について、顔師古は「王子侯表に清河王の子豹は始めに新郷侯に封ぜられる、と……中略……而して此こには信郷侯に作る。古には新信同音なるが故のみ（王子侯表清河王子豹始封新郷侯……中略……而此作信郷侯。古者新信同音故耳）⁶⁵」と注釈し、また鄭玄が『詩』小雅の十月之交においての「朔月辛卯」に「辛、金なり（辛、金也）」、及び『尚書』洪範においての「二日言」に「言、金に属す（言、属金）」⁶⁶と注釈した点を挙げる。

呉氏の説は示唆に富むが、当時の資料が不完全であるため、再検討する余地があると考える。

辛					言				
 後上 17.1 粹 962 粹 1475 一期三期五期  粹 723 粹 396 二期四期					 合 21631 拾 8.1 乙 766 一期一期四期  甲 499 京津 3561 一期二期				
 申父辛簠 貴父辛觶 刺 卣 父辛爵 考 卣 商代商代商代商代周早					 伯矩鼎 周早				
 父辛并觶 父辛卣 辛卯羊鼎 利 簠 耳 尊 蔡侯申尊 商代商代商代周早周早春秋					 中山王鼎 戰國				

文哲季刊五卷三号』1936年。『古文字詁林』では『文史季刊』から引用しているが、引用が不正確である。

⁶⁴ 植字不便のため、呉氏の引用は概略を挙げる。また、『古文字類編』の用例と呉氏の挙げた用例がほぼ同じなので、本稿には『古文字類編』の用例を取り上げる。

⁶⁵ 後漢・班固『漢書』王莽伝（中華書局 1964）4052-4053頁に拠る。

⁶⁶ 『古文字詁林』715頁に拠る。

図三のように、できるだけ多くの「辛」字と「言」字を見れば、恐らく「辛」字と「言」字が同源字という結論は出ないと言える。しかも、「辛、金なり（辛、金也）」「言、金に属す（言、属金）」のような漢代以降成立した説では、「辛」字と「言」字との発音が近いと結論づけられるが、必ずしもこの二字が同音字であるとは言えない。

ちなみに、現代における上古音の擬音によれば、「辛」字と「言」字「音」字は同部ではない。例えば王力氏はそれぞれ「真部」「寒部」「侵部」に属するとし、発音を[sien][ɲian][iam]⁶⁸と推定した。

呉其昌氏は「音・言」字と「辛」字の同源関係を考察したが、論証する方法は万全と言い難い。これに対し劉釗氏は、異体字と「飾筆」に基づき「音・言」字と「辛」字を更に詳しく検討した。

異体字とは、一般的には、正字以外の古字・本字・俗字・偽字などを総称し、正字と音韻や意味がほぼ同じ字である⁶⁹。甲骨文字と金文においても、ひとつの字種に互いに異なる字体を有し、複数の字体が併存している。すなわち異体字が存在していると言うことができよう。

甲骨文字と金文において異体字が生じる原因の一つは、「飾筆」という現象である。飾筆については、劉釗氏は「（飾筆とは、）文字の発展変化の中で、形体に対して美化或いは装飾する角度から添加される、字音や字義にまったく関係のない筆画であり、文字の剰余部分である。

（（飾筆）是指文字在發展演變中、出於對形体進行美化或裝飾的角度添加的与字音字義都無關的筆画、是文字的羨余部分⁷⁰。）」と定義する。例えば、前述の如く、「舌」字については、白川氏などが指摘するとおり、唾液を表す小点を加えた異体字もある⁷¹と見なすことができるが、これも飾筆説の観点から見れば、飾筆の一種類ともいえる。

「飾筆」を原因の一つとする以外に、劉氏は、以下のように異体字が生じた原因を挙げる。紙幅の都合上、具体的な定義と説明を省略し、例字のみを挙げる。

⁶⁷ 『古文字類編』1222 頁と 1081 頁に拠る。





⁶⁸ 王力『王力 第十卷 漢語語音史』（山東教育出版社 1987）60 頁「先秦 29 韻部例字表」に拠る。

⁶⁹ 古文書解読指導研究会編『異体字の基礎知識』（柏書房 1980）4 頁に拠る。



⁷⁰ 劉釗『古文字構形学』（福建人民出版社 2006）23 頁に拠る。また、現在中国の文字学界では、「飾筆」は「羨筆」と呼ばれることがある。



⁷¹ 『甲骨文字小字典』107 頁に拠る。





書写与形体的线条化： —  (天)  —  (齒)

形体的省略： —  (明)  —  (壺)

形体的繁簡： —  (舌)  —  (良)

形体的相通：「人」と「大」が繋がっていた。 —  (死)

形体的訛混：「口」と「凵」が混用されていた。 —  (吝)

異体与変形： —  (目)  —  (春)

以上の学説を踏まえ、劉氏は「𠂔 (辛)」字字形の変化を図四のように、変化する前後順序に照らして、漢字の構成部分として9種類に分ける。この9種を、劉氏は「式」と称する。

「言」字の聲符「𠂔」は、劉氏が主張する「𠂔 (辛)」字の規律を満たしている。「言」字は、『説文解字』に記載された「口に従い𠂔の聲 (従口𠂔聲)」の如く、「辛」を聲符とし、「口」を意符とすると判明したと言えよう。

式 例	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔
辛		𠂔							
商	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	
言		𠂔	𠂔						

図四⁷²

二・3「一を含む（含一）」と「音」字・「言」字の分化

先述の通り、許慎は「音」字を「言に従い、一を含む（従言含一）」とするが、「一を含む（含一）」を直接には解釈していない。段玉裁が「節有るの意なり（有節之意也）」と解釈し、白川静が「器の自鳴を示す意である」としている。

王寧氏によれば、甲骨文字における「大」字と「太」字は同源字とされるが、後代「太」字の意味を区別づけるため、「大」字の下に「丶」点をつけるようになる⁷³。「丶」のような「独立に存在せず、外の一つの構件に存在し、区別と指事のはたらきをする、即ち標示機能を有する。（不独立存在、而是存在另一個構件⁷⁴上、起区別和指事作用、即具有標示功能⁷⁵。）」という部分は「標示構件」と呼ばれる。王寧氏は「大」字と「太」字以外に、甲骨文字では一般的

に同源字と見なされる 6 例を挙げる。「𠂔」（少）字と「𠂔」（小）字、「𠂔」（旬）字と「𠂔」（云）字、「𠂔」（尤）字と「𠂔」（又）字、「𠂔」（千）字と「𠂔」（人）字、「𠂔」（百）字と「𠂔」（白）字及び小篆における「𠂔」（卒）字と「𠂔」（衣）字が挙げられる⁷⁶。

⁷² 『古文字構形学』55 頁に拠る。

⁷³ 王寧『漢字構形学講座』（三民書局 2013）123 頁に拠る。

⁷⁴ 漢字を形づくる単位が「構件」（部件とも呼ばれる）である（漢字的構形単位是構件(也称部件)）。王寧『漢字構形学講座』（上海教育出版社 2002）35 頁に拠る。

⁷⁵ 王寧『漢字構形学講座』（上海教育出版社 2002）54 頁に拠る。

⁷⁶ 王寧『漢字構形学講座』（上海教育出版社 2002）54-55 頁に拠る。

以上の説によると、文字学の観点に立って考えれば、「一」は、實際上の語の意味がない「標示構件」と見なしてもよいのであろう。つまり、「音」字と「言」字が同源字であり、字源上の区別として、標示構件「一」がつけられたと考えられる。

さらに、「音」字と「言」字との分化の標識は、標示構件「一」をつけることである。分化した時期はいつであろうか。図一によれば、甲骨文字に「音」字とされているものは、一字もないので、高明氏が以下のように書いている。「音字は、現有材料によって見れば、春秋に最も早く現れる（音字、拠現有資料看、最早出現在春秋⁷⁷）」。即ち「音」字と「言」字の分化は、春秋時代から始まったとことが知られる。要するに、「音」字は「言」字の分化字であると言えよう。

また、字形分化の原因について、劉釗氏は以下のように述べる。













古文字由於每個字的使用頻率不同、其發展演變的速度也就不同。一些字在其單獨存在與其作為偏旁時發展速度是有差異的。一些字作為偏旁與不同的字組合成新的複合形態之後、因受與其組合的形體的制約、其發展演變也呈現出不同的狀態。⁷⁸

古文字は、一字ごとの使用頻度が同じではないから、それぞれの発展変化する速度も同じではない。ある種の字は、単独に存在するのと偏旁として使われる時では、発展する速度に差がある。ある種の字は、偏旁として異なる字と組み合わせられ、新しい複合形態と成った後、その組み合わせた形態の制約を受けるから、その発展変化も同じでない状態を呈している。

換言すれば、「音」字が「言」字からすでに分化したとしても、「構件」としての「音」と「言」は、相対的に変化が遅いため、図五の示すように、未だに分化しておらず混用されているということが分かる。

⁷⁷ 高明『中国古文字学通論』（北京大学出版社 1996）136 に拠る。

⁷⁸ 『古文字構形学』55 頁に拠る。

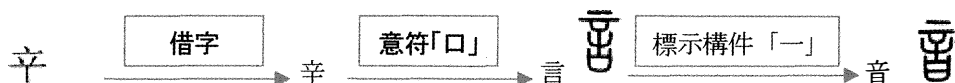
	𨮒	𨮒	𨮒	謹	訶	語
从音	 邾王子钟	 沈儿钟	 邾王子钟	 陶文	 琿印	 琿印
从言	 广韵	 王孙钟	 王孙寿甗	 陶文	 蔡侯钟	 余义钟

図五⁷⁹

二・４「音」字の成り立ち

以上に、「音」字が「言に従う（言従）」こと、つまり「音」字と「言」字の成り立ちに関する五つの説を検討した。その中で、「大籀説」「祭器説」「舌上説」「木鐸説」に若干の問題があることを指摘した。「形聲説」は、『説文解字』に記述があり、かつ文字学の規律を満たしているので、最も有力な説と考えられる。そして、「一を含む（含一）」については、「一」は、實際上の語の意味がなく、文字の分化の標識としての標示構件の「一」である。さらに、「音」字は「言」字の分化字であり、その分化が春秋時代から始まったということが分かった。

したがって、本稿は「形聲説」を採用し、「音」字は形聲文字であると認める以上、「辛」が聲符であり、「口」が意符であることは明らかである。「音」字の成り立ちを下のように示す。



おわりに

⁷⁹ 『中国古文字学通論』85 頁に拠る。

本稿は、「音」と「聲」の区別を研究する一環として、「音」字の成り立ちと用法との二つの側面から検討したものである。『説文解字』における「音」字の記述には、不明な点が多いので、出土文献や古文字などの資料を利用し、考察する余地がある。先行研究には、「大籥説」「祭器説」「舌上説」「木鐸説」「形聲説」合わせて五つの説があり、その中で、本稿は「形聲説」を支持する。すなわち「音」字は、聲符を「辛」とし、意符を「口」とする形聲文字である。

しかし、本稿では、伝世文献と出土文献における「音」字の用法に関する検討がまだ足りないから、あくまでも推測の域に留まっている。また、「聲」字の成り立ちや用法、及び「音」字と「聲」字の区別を探究することが、今後の大きな課題として残される。